



企画実践編

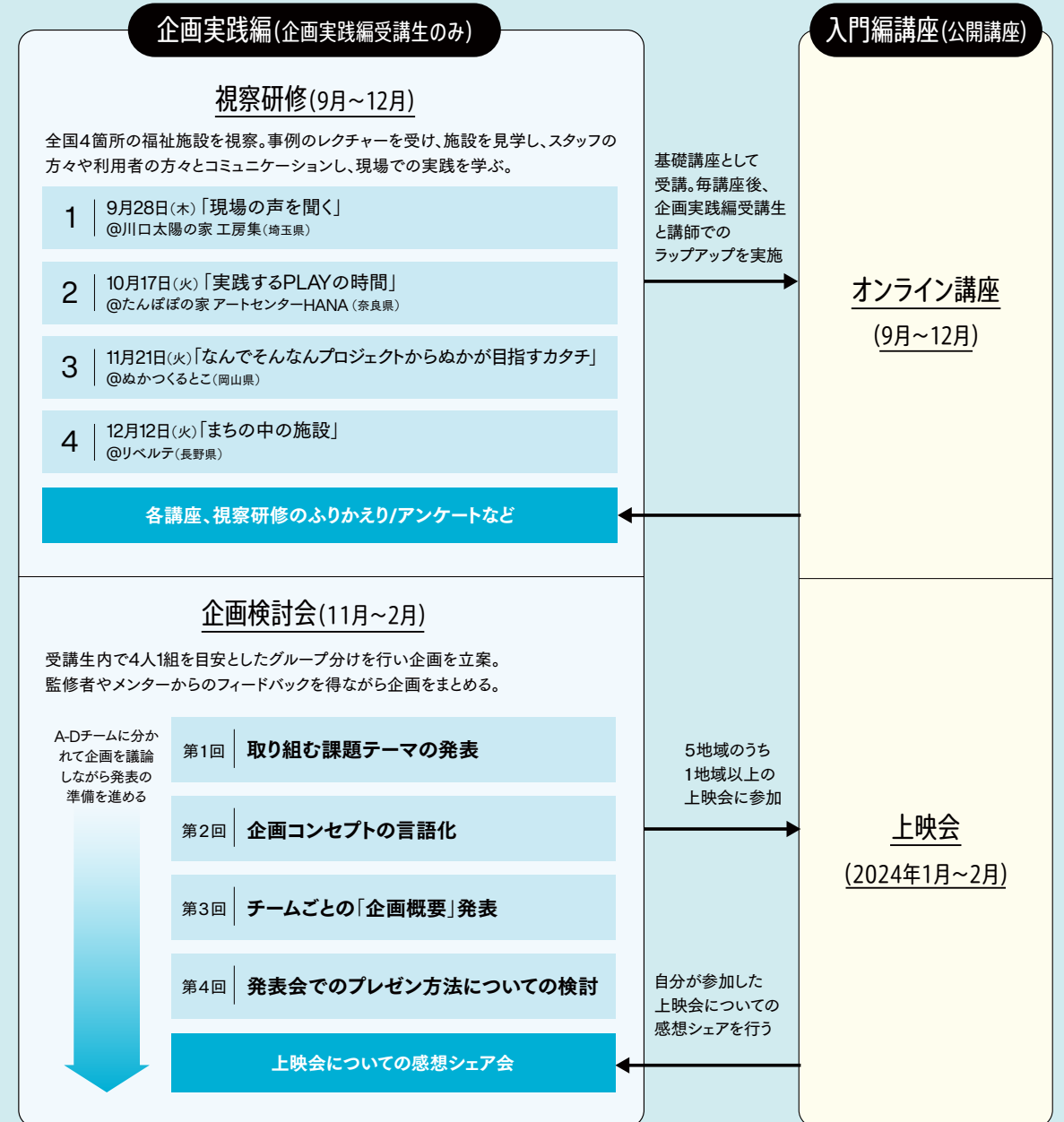
視察研修と企画立案

オンライン講座、全国各地の福祉施設への視察研修を通じて、障害当事者の生活状況や、施設の方々のケアのポイント、芸術とケアの接点や効果、アートと福祉を通じた地域社会のあり方について学びます。実際に自分たちの活動領域で実践できる企画（ワークショップや創作活動、鑑賞プログラム等）を立案、専門家の助言をもらいながら、実施できるまで考え発表します。

- 視察研修(全4回)
- 企画検討会(全4回)
- 上映会ディスカッション
- 企画発表会
(ロームシアター京都 ノースホール)

企画実践編 プログラムの流れ

8月に受講生募集を行い、集まった受講生は、2023年9月より2024年2月末まで、以下のような流れで「入門編」「企画実践編」両方、約半年間のプログラムを受講しました。





埼玉県 川口太陽の家・工房集

— 同じ時代を生きる「仲間」とともにひらく、表現活動の可能性

「どんなに重い障がいがあっても『働くことは権利』である」

川口太陽の家・工房集を運営する社会福祉法人、みぬま福祉会が設立当初より大切にしてきた言葉だそうです。

埼玉県川口市にある川口太陽の家・工房集は、重度の障害のある方たちが自分らしく働く場づくりに力を入れている福祉施設で、表現活動を行う拠点は2箇所。川口太陽の家(じゅうに班・サンだいいち班・あおぞら班・きらっと班)と川口太陽の家・工房集(めーべ班)に分かれています。設立当初は主に掃除に使うウェス(雑巾)づくりや缶プレスなどの軽作業を中心としていましたが、ある女性がその仕事を拒否するという出来事。当時スタッフだった、現・工房集代表の宮本さんは、「この人はどんなことならやりたいと思うのだろう?」とその女性を観察し、絵を描いている姿を見て、「お祭りのポスターに絵を描いてくれない?」とお願いしたところ、喜んで描いてくれました。それ以来、その女性にイラストをお願いするようになった、というのが表現活動の原点になったそうです。現在では、絵画、織り、ステンドグラス、身体表現などの表現活動の幅を広げ、現在57名程の方が通われており、その活動のあり方も多様です。



川口太陽の家・工房集を運営する社会福祉法人

工房集は福祉施設であり、社会福祉法人みぬま福祉会を利用するメンバーの表現プロジェクトを社会につなげるための活動拠点として2002年に開設しました。アトリエ、ギャラリー、ショップ、カフェを備えた施設では、メンバーとともにゆるやかに変化し、そんな場づくりを福祉関係者だけでなく建築家、アーティスト、キュレーター等と共に築いています。現在は、法人全体で12のアトリエを中心に150名程が仕事としてさまざまな表現を生み出し、国内外での展覧会への出展や、企業との協働など、活動が多岐に渡っています。
所在地 | 埼玉県川口市木曾呂1445 URL | <https://kobo-syu.com/>

才能豊かな仲間たちからの作品プレゼンテーション

スタッフの方のご案内で、各工房をまわり、表現活動を見学させていただく。研修メンバーがお邪魔すると、ご自身の作品を紹介していただき、受講生みんなに名刺をくださったたり、作品集を見せてくださる方も。地域の企業からお仕事をもらってデザインをされている方、海外の有名美術館に作品が所蔵されている方、見たことのないようなユニークな作品を何年もかけて制作されている方。それぞれの方にとってアートとの関わり、作品をつくるのがどうして必要なのか、どうしてそのような制作スタイルが生まれたのか、というお話も興味深いことばかりです。「作品をつくるということは、仲間にとって、心や身体の状態やペースをあらわしています」とスタッフさん。

「どうやってその人の表現を見つけるんですか?」という質問に対して、「すぐにその人の表現が見つかる場合もあれば何年かかかる場合もある。観察して、この人にこれをやらしてもらったらどうだろう?あ、違った。これはどうかな?と試行錯誤していくことが多いですね」と答えくださり増した。「もともと私たちは、美術の可能性から活動を始めてきましたが、動く方の表現も何らかの可能性があるのでないかと考えるようになりました。ダンスのワークショップを2017年くらいから始め

ています。」とのこと。

川口太陽の家・工房集では、メンバーを”共に同じ時代を生きている同志である”という思いを込めて「仲間」と呼びあうそう。建築家、アーティスト、キュレーターなどさまざまな外部のコラボレーターとも共同しながら場づくりをさらに広げています。



タイムテーブル

10:00

11:00

12:00

13:00

集合(東浦和駅)
川口太陽の家 見学
工房集 見学

14:00

15:00

交流・質疑応答
施設からの取り組みのご紹介
感想シェア

16:00 終了



受講生の声

- 「利用者の個性から生まれる何らかのもの」が作品になり、展示して、海外にでて、実績を作っていくことをやっている。これは障害のある人たちのエンパワメントとして有効だと思った
- そもそもの出発が美術や建築などのアートの分野からきているというもあり、空間や関係をどう設計するかということをもさまざまな視点から考えてらっしゃるというのが印象に残った
- 教えたり、技術を身に付けさせることより、プロセスを大事にしていて、そのさきに発信があるという考え方が素敵
- アーティストや芸大・美大出身者が働いていたり、福祉以外の分野から人が入っているのが良いと思った





奈良県 たんぽぽの家／アートセンターHANA

— すべての人がアートを通じて、自分を表現し、自分を知る

豊かな社会とは、ちがいを認め合う文化をつくり、ひとり一人が自分の可能性を発揮して、よりよい生き方ができること。

障害のある人の芸術活動の拠点アートセンターHANA、生活支援センター、福祉ホーム、カフェ、ギャラリーなどを運営し、地域にひらかれた拠点として、奈良県内で複数の拠点を運営しているたんぽぽの家。養護学校に通っていた子ども達が卒業後に活動できる場所を作ろうと、保護者たちが立ち上げた団体からはじまり、今年で50周年を迎えます。

たんぽぽの家アートセンターHANAは、アートを通じて障害のあるメンバーの活動や仕事をつくり、感性の交感のできるような地域にひらかれた場づくりを目指して、絵画やテキスタイル、陶芸などさまざまな活動を行ってきました。入り口を入ると、すぐにオープンなギャラリースペース。1階には、それぞれのプログラムが実施されるスタジオやメンバーの作品がぎっしり積まれた収蔵倉庫。スタッフさんは、メンバーそれぞれがやりたいことを聞き取り、「自分でやれることは自分でやる」ことを大切にしながら、一人一人違ったプログラムで活動できるようサポートしています。外部講師を招いての学びの活動、ネイルなどの楽しみの活動、ダンスや演劇、語り、音楽のプログラムまで、幅広い活動があります。



たんぽぽの家 アートセンターHANA

2004年、日本で初の障害のある人のアートセンターとしてオープン。すべての人がアートを通じて自由に自分を表現したり、互いの感性を交感することができるコミュニティ・アートセンター。障害のある人たちが個性をいかしながらビジュアルアーツやパフォーマンスアーツに取り組むスタジオ、今を生きる人たちの表現を紹介するギャラリー、コミュニケーションの場としてのカフェ&ショップ、アートの可能性について探求するインフォメーションセンターやミーティングルームがある。

所在地 | 奈良県奈良市六条西 3-25-4 URL | <http://tanpoponoye.org/>

障害のある人の演劇活動。HANA PLAYの見学

さまざまなプログラムのうち、演劇プログラム HANA PLAYを見学させていただきました。演劇メンバーは、自分で動ける人も、動けない人も含めた車椅子ユーザー、知的障害のあるメンバーと、それぞれのメンバーの日常や必要なケア、得意な表現を知っているスタッフが、ケアもしながら、共にパフォーマンスをつくり、演じます。

また、上演される題材は、メンバーの日常の中から紡ぎ出されるそれぞれの物語を基盤につくっていくのも特徴的。脚本があって、台詞を覚えて演じるということが、なかなか身体に馴染みにくいメンバーでも、自分の物語であればスッと入っていける、ということに気づき、演出や脚本を担当する佐藤さんとメンバー、スタッフが独自に編み上げていった創作のプロセスです。

若い頃からもう何十年も一緒にいて、舞台にも共に立ってきたメンバー同士。「普段演劇をやっていてどうですか?」という質問に、メンバーそれぞれ「この人はアドリブが多い」「他の人の表現を真似している」「今度はクリスマスに別のところで上演したい」など、それぞれの思いや普段の様子を語っていただきました。



タイムテーブル

10:00

集合(HANA)
演劇プログラム「HANA PLAY」の見学、
稽古の様子見学



12:00

昼食



13:00

見学
演劇プログラム「HANA PLAY」の見学、
稽古の様子見学



15:00

質疑応答
前半はたんぽぽの家のメンバーを交えて



終了

16:00

受講生の声

- アーティスト集団として、とてもクリエイティブで、大きなアートセンターである、という印象を受けた
- 美大や芸大出身者が多いというスタッフさんたちがいらっしゃるからなのか見せ方が素敵。デザインセンス、デザインによって障害のある人の表現活動をサポートするという技術をととても感じた
- HANA PLAYの稽古を見学して、台本を持たずに、本人の体験をもとにした言葉を、自分の言葉で、自分の経験として演技していく創作プロセスに興味を持った
- HANA PLAYの稽古を見学して、ここまで自然に成立するんだと驚いた。私はこれまで「重度の障害のある人には演劇ができる」と想像していなかったのだと気づいた





岡山県生活介護事業所「ぬかつくるところ」

—コントロールしきれないものが糠床をつくり、面白いものを生み出す

「ぬかびとさん」と「まぜびとさん」。関わる全ての人楽しい場づくり

—あっと驚くようなひらめきも、くだらないと思えるような思いつきもちょっとずつやってみる。例えば、お風呂の中や、自転車をごいでいるときなどのふとした瞬間。自分のなかで思い立って「ニヤッ」としてしまうこと。そんなアイデアを形にできたら楽しいだろうと常々思っています。そしてそれは…「いまだ!」と思うのです。(HPより)

築100年以上の蔵を改装してつくられたという風情ある場所。18歳から65歳まで、20名くらいの方が通う生活介護事業所「ぬかつくるところ」。ユニークな事業所名は、発酵食品の「ぬか」から来ているそうです。

スタッフや通っている人たちを「ぬかびと」さん、糠床を混ぜてくれる外部の人を「まぜびと」さんと呼び、関わるみんなが共に楽しむ場をつくる。それを目当てに人がやってくるようなおいしいランチの提供。得意なことでも不得意なことでも、周囲からみてその人にしかできないことを「仕事」と定義して、とにかくアイデアを形にしてみる。そんな風に「ぬか」をどんどん豊かにしていくような、ゆるやかで柔軟な補助線のようなものは、関わる人をドキドキさせてくれます。



ぬかつくるところ

様々なひとが行き交い、生活のなかでおこるささいなデキゴトに目を向け、それに一喜一憂し、ゆっくりと自分や他者を見つめ、成功も失敗もできる場所。「ぬか」は岡山県早島町にある福祉事業所です。正面から捉えるとひるんでしまうことも、ちょっと角度を変えてみれば、だれも気付かなかった価値が生まれたりする。そういった価値や個々の魅力が【ぬか漬】のように時間をかけてゆっくりと発酵し、社会へと広がって行くことを願って【ぬか】という名前に思いをのせています。
所在地 | 岡山県都窪郡早島町早島1465-1 URL | <http://nuca.jp>

あらゆることを遊び尽くす!

活動についてのレクチャーと、3チームに分かれて生活介護事業所「ぬかつくるところ」、子ども向け施設「アトリエぬかごっこ」の見学をさせていただきました。

マイペースにものづくりができる、6~18才(小学生~高校生)を対象としたアトリエ「アトリエぬかごっこ」では、施設の中には、子どもたちが、いかにその空間を遊んでいるかがわかるような様々な痕跡をみることができました。ものに名前をつけて遊んだり、コードを蛇の抜け柄に見立てたり、工作された沢山の統があったり。

「ぬかつくるところ」に伺うと、ぬかびとさんたちからの全力のもてなし!「誰かに名前をつけることを生業にしている人」、「オセロが強い人」、「重たくないものを重そうに持ち上げる、ウェイトリフティングを仕事にしている人」。施設に入った瞬間に、アイドルソングが高らかに鳴り響き、ウェイトリフティング大会が始まり、受講生のひとは「どうする家康」というあだ名をもらったり。施設見学のあとは、地元のおいしいお菓子をいただきながら座談会。ぬかびとさんたち、スタッフさんの楽しそうな様子と楽しむ姿勢に、圧倒されながら、たくさんの元氣と笑いをいただきました。



タイムテーブル

10:00

集合 (JR 宇野線 早島駅前)

11:00

レクチャー

地域のコミュニティハウスにて「ぬか・なんでそんなん」の説明

12:00

昼食・休憩

ぬかつくるところの昼食を提供しているシェフによるランチ

13:00

施設見学

「ぬかつくるところ」「アトリエぬかごっこ」3チームに分かれて移動し、上記2つの事業所を見学・体験

14:00

15:00

ディスカッション&振り返り

ぬかつくるところ(丹正さん・中野さん)、山川陸さんも交えたディスカッション&振り返り

16:00

終了



受講生の声

- アートをやろうという感じがなくて、障害と名指さずに、人の個性を面白がるというスタンス、その人の個性に応じて社会参加を促す姿勢が、単純にとても楽しそうであり、生きていくことを肯定している感じがして、印象的だった
- 蔵という、段差などのバリアがありそうな場所で運営していることに驚いた。バリアがあっても、人海戦術で移動する、コミュニケーションを大事にされているという印象を受けた。「バリアがあるからこそコミュニケーションが取れる」
- スタッフさん、外からの人。さまざまな人を大事にされていることがいろんなところにつながっている印象。巻き込まれる人が楽しめる
- 職員さんもぬかびとさんも、楽しいことをするセンス、デザインセンス、身近なものを生かしたり、見方を変えるセンスに溢れていて素敵だった
- はちゃめちゃでパワーに圧倒された。「なんでそんなん」という精神、ケアする側される側という分け方ではなく、実際に関わる中で、「この人はなんでこんなことするの?」というのをみんなで面白がっていくのが素敵だなと思った。



長野県 NPO法人リベルテ

——まちと福祉の関係を問う、点在する福祉とアートの拠点

街にあまりにも馴染んでいる。上田市に点在する、文化と福祉の拠点

——街を歩くその先で眺める風景や、ふと手にとったペンで描く線や形、または自分の何気なく選んだ今日の服装も、大切な個性や自己決定であり自由です。私たちリベルテは障害のある方たちと、そんな「何気ない自由」や「権利」を尊重していける社会や人、関係づくりを行っていきます。(HPより)

リベルテさんは、「障害のある人の営みやケアを表現活動としてオープンにひらき、ひとつの文化を目指す」という理念の下、地域内外のつくり手や地域の人たちとの共同でさまざまなプロジェクトを展開されています。

上田市の街の中に複数かまえるリベルテさん。就労支援、自立訓練、生活介護を行う拠点「スタジオライト」は、大きく分けて3拠点あり、閑静な住宅街の路地にあるアトリエ「roji」、城下町の街並みの一角にある「柳町」、住宅の中にあまりにも馴染んでたたずむ「丸堀」。トンカツ屋さんを改装した「1の人100の言葉1000の時間」という拠点も新たに加わり、それぞれが、それぞれに、ユニークな活動を行なわれています。一見すると、福祉施設に見えない拠点も。あまりに、佇まいや在り方が街に馴染んでいる。そんな印象がありました。



リベルテ

リベルテは2013年4月に設立したNPO法人。障害のある人たちとともに、日々の何気ない「自由」や「権利」を尊重していける社会や人、関係づくりを行うことを目指している。障害のある人を対象に上田市街に4拠点、アート活動を行う拠点を展開。その1つ「roji」の庭はメンバーとガーデナーがアーティストやご近所さん、学生と庭づくりのワークショップを通じて「公園」になっている。その公園づくりから始まった福祉施設と地域の境界線を曖昧にするアートプロジェクト「路地の開き」を展開中。

所在地 | 長野県上田市中央西1丁目9-5 URL | <http://npo-liberte.org>

「時間の余白」観察することで見えた、リベルテとまちの関わり

施設の成り立ちや事例についてスタッフの方からお話を伺った後は、チームに分かれて街歩きです。今回の視察、参加者には事前に「まちとの関係性について考えるまちあるきの時間がありますので、歩きやすい格好でお越しください。」という連絡がありました。消防団の「まとい」のようなステッキをもって先導してくれたのは、リベルテの仲間たち(メンバー)です。街歩きは、リベルテに通う人が考案したという、3つのコースが設定されていました。

- ・上田の町中のグルメを辿ることができる「いつかのいっつけルート」、
- ・上田の駅からリベルテまでの間でトイレを貸してくれるお店が網羅されている「下のセーフティーネットルート」
- ・メンバーおすすめの、お散歩ルートから考案された「つるかめおじさんおさんぽルート」。

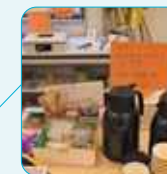
※こちらのコースは、「路地の開き」の一貫として「リベルテと世界を結ぶ街歩き」のプロジェクトで考案されたものです。

今回は、「チームにとって思い出深い場所となったコース内のスポットで記念撮影をしていくこと」というミッションも与えられました。街を歩いていると地域の方がお店から出てきて声をかけてくださってお話が弾むことも。地図を片手に「時間の余白」を味わいながら、まちや人を観察し、まちと福祉施設の関係性について体感することができた視察でした。



タイムテーブル

10:00	集合(上田駅 お城口 広場) リベルテについて 理念や取り組みの紹介、展示鑑賞
11:00	各アトリエへプチ街歩き
12:00	アトリエにて昼食
13:00	自由時間 アトリエに滞在してリベルテの雰囲気を 楽しむのも、まちに出てまち歩きするのもOK 街歩き用の地図を共有
14:00	
15:00	1日を経て質疑応答など
16:00	終了



受講生の声

- 個人が集まって集合になった感じの素晴らしさがあると思った。集まってきた人同士が関係を持ったことで生まれた空気が良かった
- まちの中の一つの拠点。つながってる感じがした。
- 街歩きを体感できたのはすごくよかった。
- お菓子作り教室をやっていたところに出くわして、地域の子どもたちが集まっている様子を見たり、リベルテを訪ねてきた地域の人に話しかけられたりして、なんだか、人が集う、「公民館」のようだなと思った。



企画検討会

劇場関係者、舞台制作、アーティスト、元福祉従事者、美術関係者、大学生…背景の異なるメンバーで考えるのは「劇場の課題」

入門編の講座、上映会、そして視察研修と並行して11月よりスタートした企画実践編の検討会。3名から5名のさまざまなバックグラウンドを持つ受講生同士で4つのチームが結成され、オンライン会議を中心としたコミュニケーションを通じて、チーム課題を進めてゆきました。

テーマは、「劇場に来ることへのバリアを感じている人が劇場に来なくなる企画」

今回の課題は、「劇場に来ることへのバリアを感じている人が劇場に来なくなる企画」を考えること。演劇やダンス、音楽など舞台芸術の公演の企画、ワークショップやフェスティバルなど、自由な発想でテーマに合う催しを考えてチームごとにプレゼンテーションを行います。必須条件は、今回の最終成果発表会の舞台であるロームシアターノースホールを使った、舞台芸術に関わる取り組みであること。そして、その創作や鑑賞に障害当事者が関わることを前提としていることです。

オンラインではじめて対面する参加者同士も多く、時間も限られる中、全員が集まる場として設定されているZoomのフィードバック会は、全5回。初回の「お題の発表」からはじまり、「コンセプト」「企画概要」「プレゼン方法」をチームごとに発表して、監修者やメンターから意見を貰う場に加えて、上映会の感想をシェアし、互いに言語化する会が設定されました。

「そもそも劇場にバリアを感じているのは、障害のある人だけではない」企画軸をいかに設定する？

進行は各チームに委ねられており、コンセプトや対象の設定など、着眼点もチームによって様々です。監修者やメンターのアドバイスも受け、「そもそも“劇場へのバリア”を感じているのは、障害当事者だけではない。多くの人にとって舞台芸術鑑賞や劇場はそもそも身近になっていないのではないか?」「障害のある人もさまざま。対象どのように設定すべきか?」「ロームシアターノースホールという劇場でやることを想定した催し。地域性、空間そのもの、劇場の特性を生かした企画とはどのようなものか?」といった重要なポイントを組み込みながら詳細を詰めてゆきます。

各チームが手がかりにしたのは、チームメンバーそれぞれの体験や経験。それぞれの障害当事者との関わり、職場での出来事、仕事の経験などのシェアから企画の種を見つけてゆきました。北海道から福岡まで、様々な地域、様々な職能などのバックグラウンドを持つ人たちが集まったからこそこの視点、発想が企画に組み込まれてゆきました。



受講メンバープロフィール

チームA

阿部 藍子

(コーディネーター/俳優)
パフォーマンスユニットPANCETTAの企画制作を担当。日常に舞台が入り込む企画をいろんなオモシロイ人とやる。これから生きるムスメがハッピーになることをやっていきたい。



井手 優介

ワークショップやイベント、映像、展示の制作などを行う。ポートフォリオ | <https://yusukeidetumblr.com/>



今野 はるか

((公財)可見市文化芸術振興財団事業制作課職員)
前職の(公財)堺市文化振興財団にて、学校や子ども食堂等でのWS企画制作を担当し、「社会課題解決のための文化芸術」の魅力にはまる。2023年春より現職。



高石 萌生

(九州大学大学院芸術工学府博士後期課程)
社会包摂とアートの関わりに関心を抱き、模索を開始。現在は障害のある人の表現活動を中心に研究に取り組む。



ふじわらあかり

(ティーチングアーティスト)
演劇やダンスを通した教育プログラムや障がいを持つ方々との芸術活動にて指導、ファシリテーターをしています。風のようにどこへでも飛んでいく旅人気質。



チームB

児島 美穂

(一般財団法人地域創造 職員/モンガ・コンプレックス制作)
1990年東京都出身。都内の公共ホールに勤務後、2019年〜現職。すべてにおいてダンスにひたりながら、文化芸術はライフラインのひとつと信じて活動中。



ZR

1998年生まれ。2019年に東京大学教養学部在学中に演劇カンパニー「人間の条件」を立ち上げ。以降ほぼすべての作品の作・構成・演出に携わる。



藤 友里江

社協・自治体・公立劇場で、福祉や地域づくり・舞台芸術に関する事業企画の担当やコーディネーターを経て、熊本・福岡で福祉とアート、地域とアートを繋ぐ活動を行う。



チームC

吉備 久美子

(教育普及担当学芸員)
学校連携や社会包摂などの各種事業を通じて、「多くの市民により多様性が尊重され、芸術文化を通じた社会参加がなされる美術館」形成に取り組んでいる。



野口 竜平

(芸術探検家)
「遭遇の方法」について考えながら、制作をつづける。



浜田 誠太郎

(俳優/演劇研究)
1996年生。主に俳優。研究の関心は20世紀ロシアの演劇論の思想史的背景とその実践の記述。早稲田小劇場どらま館の制作部にてワークショップなどの企画・運営。



山岡 まゆみ

(MITATEYA合同会社代表/ダンスカンパニー-CAT-A-TAC(キャットアタック)プロデューサー)
小劇場から商業演劇まで制作として幅広く活動。加えて発達障がいや知的障がい者を中心に、障がいと舞台芸術やアートを結ぶ事業、きょうだい児支援やインクルーシブ教育など、共生社会を目指して奮闘中。



米満 香菜

(建築設計事務所 事務職)
会社員として働きながら、自身の原体験から、認知症啓発のイベントに携わっています。福祉×文化芸術の可能性を感じて、本講座に参加。



チームD

神田 圭美

コンテンポラリー/ダイバーシティ分野の舞台芸術、展覧会、フェスティバルなどの制作を事務局やフリーランスとして活動。国内外の芸術祭と戦跡・紛争地訪問がライフワーク。



滝田 織江

クラシック音楽事務所勤務。アーティストマネジメントのほか、音楽祭の制作を担当。



千田 ひなた

岩手県生まれ。日本大学芸術学部演劇学科に在学中。大学でアートマネジメントを学びながら、舞台芸術の企画・運営に携わる。演劇をする団体「コーゴ 指」の制作も担当している。



港 岳彦

映画やドラマの脚本を書く。障害当事者による舞台芸術の実現を目指して修行中!



吉田 真弓

(きーなじっけんしつ、奈良カフェアナログゲーム部 主宰)
玩具店を運営するかわら、アートプロジェクトのコーディネーターや、パフォーミング・アーツの企画をしている。マルジナリア やすらぎの道文化祭プロジェクト(2021)



企画発表会

ロームシアターノースホールを舞台にした、半年間の成果発表の場

2024年2月28日(水)、京都のロームシアターノースホールにて、約半年間の企画検討会を経て、4チームの受講生による、各チームの企画プレゼンテーションが開催されました。

メンバーの経験値を持ち寄り構成する。 個性豊かな最終成果発表会のプレゼンテーション

当日の発表は、自由形式。受講生は、朝から会場入りし、それぞれのプレゼンテーションのための仕込みを行います。直前に7時間ものオンラインMTGを行ったというチームや、自主的に発表会の前日に京都に集合し、綿密なリハーサルを行ったというチームも。プレゼンテーションの方法も、寸劇形式、ワークショップ形式、展示形式など、チームの個性が出ていました。

この日は、これまで半年間共に企画検討に並走してきた監修者の長津結一郎さん(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)、文さん(NPO法人DANCE BOX 事務局長)、メンターの山川 陸さん(アーティスト)も駆けつけ、最終成果を見守ります。また、フィードバックとして4名の専門家の方々をお招きし、ご意見、ご感想、アドバイスをいただきました。

熱を帯びた対話の時間。 それぞれの現場で、挑戦はつづく

「そもそもこの企画実践編という一連の講座は、考えるための機会であって、企画自体の良し悪しを問題として議論する場ではない。対話の場にしたい」とメンターの山川さん。会場の真ん中には、ぐるっと円座になって議論ができるように作られた、平台と座布団のおしゃべりエリア、四隅にはAからDチームのブースが設計されました。

最後に、「このチームは、これで解散? つづくもよし、終わるもよし。でもそれぞれの現場で考え続けて欲しい」と、監修者の長津さんが投げかけます。「今回の企画を自分が働いている劇場で実践したい」「何かあった時に、一緒にやりたい、声をかけたい人ができてうれしい」受講生それぞれの想いと共に、5時間にも及んだ企画発表会が幕を閉じました。



Aチーム「日常⇔劇場 エコシステム」



企画タイトル | 「日常⇔劇場 エコシステム」
メンバー | 阿部藍子 / 井手優介 / 今野はるか / 高石萌生 / 藤原明莉
対象 | 障害のある人、福祉施設職員、劇場職員

評価

- 赤丸にいたずらを施す、ということがちょっとわかりづらかった。どうして赤丸なのか?赤丸は象徴なのか、作品なのか?(佐藤/光島)
- “いたずら”という言葉よりは、遊びや仕掛けの方がいい。劇場と施設をつなぐ、人を繋ぐというのはいい仕掛け。赤丸だけではなく、様々な色、形のキャンバスを配置することで、多様なイメージを作れるのではないかと(牧原)
- 街の中に出ていくのであれば、地域の人たちにわかりやすく、協力してもらいやすいフォーマットがあると良い。例えば、床屋さんのぐるぐるに装飾させてもらうとか。すでに街にある物との関わり(佐藤)

Bチーム「表現の学校～学校だけが学校じゃない～」



企画タイトル | 「表現の学校～学校だけが学校じゃない～」
メンバー | 大下真美 / 児島美穂 / 藤友里江 / ZR
対象 | 中学生、劇場

評価

- 中学生に何をもち帰ってもらいたいのか。障害のあるアーティストとないアーティストをつなげた授業を提供するだけでは見えてこない。細やかなテーマ設定が必要(森田)
- 中学生は難しい年頃。障害のある人と一緒に中学校でワークショップをやったことがあるが、参加してもらうことにハードルがある(佐藤)
- 遊びやゲームの要素を入れた方がいい。また、この企画は劇場じゃなくても学校でもできそう。劇場でやるという理由を入れた方がいい。(牧原)

Cチーム「Dream Night at the Theater:医療的ケア児とその家族に劇場に来てもらう第一歩を」



劇場に来ることのバリアについて考えるにあたり「慣れ」の問題にフォーカスしたというCチーム。劇場に行く側の慣れに加え、「医療的ケア児とその保護者の方が劇場に来たときにどのような対応が必要なのか」「そもそも、どうやって移動して劇場に来るのか」ということを劇場側は知らず、慣れていない、という両方の側面にフォーカス。誰でも参加できる「影絵のワークショップ」を媒介に、特別支援学校など医療的ケア児の生活の場に向いたワークショップ、送迎バスで劇場に行ってみる体験ツアーを経て、最後には劇場で公演をするというプログラムを提案。発表時は、実際に劇場を生かした影絵のパフォーマンスを実施し、場を沸かせた。

企画タイトル |

「Dream Night at the Theater:医療的ケア児とその家族に劇場に来てもらう第一歩を」

メンバー |

吉備久美子 / 野口竜平 / 浜田誠太郎 / 山岡まゆみ / 米満香菜

対象 |

医療的ケア児とその家族・介護者

評価

- 視覚に障害のある人も観客に含めるならば、影絵がどのように見せられているかということも伝えることも体験として含められるといい。視覚に障害のある人には、影絵を写すオブジェクトを触って認識する時間を設けるなど。このチームは、点字の資料をつけてくれたのが素晴らしい。(光島)
- D寧に企画が立てられていると思った。プロの影絵師にきてもらって、感動した経験をもってから、それを自分たちでもやってみる、というのも良いと思う。(牧原)

Dチーム「immersive theater『白雪姫と7人の恋びと』～森の盆踊りは恋ダンス!～」



企画の前段階として、多くのいわゆるダイバーシティ系のイベントが「障害当事者だけが出来るもの、参加するもの」になっていることや、健常者が障害当事者の生き方を感動ポルノ的に消費することへの疑問があがったというDチーム。誰にとっても敷居の低いスタイルをベースに、さまざまな障害のある人や違う言語・文化をもつ人々を含む空間で、共同作業による課題解決や議論ができることを企画の軸に定め、観客が自ら行動し、物語の一部として作品に参加する「イメージシアター」と、観客同士のコミュニケーションや共同作業で課題を解決していく「脱出ゲーム」の要素を組み込んだ企画を寸劇形式で発表した。

評価

- 資料を読んだだけでは企画内容がわからなかったが、寸劇の発表を見て納得できた。この発表自体が一つの作品だったと思う。匂いを活用していたのが面白かった。(光島)
- 体験型の演劇がすごく新鮮だなと思った。障害のある人、ないひとと協力するという試みは良い。障害のある人と共同するとき、思っていたより時間がかかったり予想外のことがある。それ自体を知れるのが良いと思う。(佐藤)
- 助け合いが本当にできるのか。ろう者が参加者したら、どうやってコミュニケーションするのか、介助者がいるのか、演技する側に当事者がいるのか。(牧原)
- 同じようなプログラムを企画したことがあり、その難しさに共感する。最終的に何を受け取ってもらいたいのかを明確にした方がいい。当事者にどう介入してもらうか? すごく勇気のいるプログラムだけど、やりがいのあるプログラムになるのでは?(森田)

企画タイトル |

immersive theater『白雪姫と7人の恋びと』
～森の盆踊りは恋ダンス!～

メンバー |

神田圭美 / 滝田織江 / 千田ひなた / 港 岳彦 / 吉田真弓

対象 |

すべての人

フィードバック

障害とアート、共生と文化芸術の企画を各分野で実践方される方にフィードバックとして企画発表会にお越しいただき、アドバイスやご意見をいただきました。



佐藤拓道

(たんぼの家アートセンター+IANA副施設長 / 俳優)
障がいのある人との演劇創作や施設外でのワークショップも展開している。

皆さんの発表はいくつも視点があり、考えさせられる事がたくさんありました。障害のある人となない人が出会う場、劇場に来る動機をいかに作るか、みなさんが研修で得た経験を企画にふんだんに盛り込み、プレゼンも芝居形式だったり、体験型だったりして大変興味深く拝見しました。それぞれに課題があり、一気に考えるとこんがらがった糸のように複雑に見えてしまいます。でも一方で、この企画プレ

ゼンをいろいろな障がいのある団体に見てもらうことも面白いと思いました。フィードバックでも話されてましたが、当事者と実践することでわかる事も多いのだと思います。絡まって見える糸も実は簡単に解けるかもしれない。こうした企画の始まりに当事者がいないこともまだまだ多い。何ができるかわからないところから障がいのある人ない人が関わる場づくりを私も実践していきたいと思いました。



光島貴之

(美術家)1954年京都府生まれ、在住。10歳頃に失明。他作家とコラボレーションした「触覚連画」の制作や、「触覚コラージュ」といった新たな表現手法を探求している。

皆さんそれぞれ工夫されていた。点字資料を用意してくれたチームもあったのは良かったし、資料で内容を読んでもよく分からなかった各チームの企画が、実際に発表会に来て、コンテンツを体験すると腹落ちした部分もあった。自分の体験として、以前、劇場の中を歩くツアーに参加し、舞台の上や舞台の裏

側、楽屋を回って歩いたことがあった。見えない自分にとっては、空っぽの劇場を「歩く」ということ自体がとても面白い。様々なニーズがある中で、いろんな障害のある人みんなをターゲットにするのは今の時点の企画では難しいので、2種類くらいの障害に絞って考えていくのが現実的なのではないかと思った。



森田かずよ

(俳優、ダンサー/車椅子ユーザー)東京パラリンピック開会式をはじめ、様々な公演に出演。大阪大学人文学研究科博士課程在籍中。

活動分野や関心事も違う人たちが集まることで、それぞれ全く違う切り口の企画が生み出されていて、どれも興味深かったです。ただひとつ、私自身も考えさせられたのは、劇場空間の特殊性でした。公共である、と言いつつも、縁遠く感じる人も多くいます。「劇場を身近に感じてもらうため」と「劇場だから出来ること」が交差する部分がまだまだありそうです。

会でも意見としてあがりましたが、企画自体を「障害当事者」と共に考え、創りあげるのは最低限必要なことです。また、この「当事者」は非常に幅が広く、そこが難しい点でもあり、面白い点でもあります。より「生」な声を聞き、同じ目線で世界を見ながら、これからもワクワクする場を共に創っていきましょう。



牧原依里

(映画作家/アーティスト)1986年生まれ、ろう者。一般社団法人日本ろう芸術協会代表。ろう者の「音楽」を聞いた「LISTEN リッスン」(2016)を共同監督など。同作品受賞多数。

グループごとの企画発表を拝見し、企画そのものに対して関心を抱いて真摯に取り組む「自分事化する」フェーズに皆さんいるのが分かり、グループそれぞれのプロセスがあったのだろうと伝わってきました。その次のフェーズは「その企画が〈当事者(参加者)のニーズ〉〈劇場としてのニーズ〉をそれぞれ満たしているか?」の検討だと感じました。障害者を対象とする企画を行うにあたって必ず必要になる作業だと私は思っています。そして「当事者(参加者)のニーズ」はアンケートからでは収集に限界が

あり、そのコミュニティに飛び込まないと見えてこなかったりします。私がいるろうコミュニティでも難聴、ろう、CODAとそれぞれ求めることが異なってくること、「障害」は一括りにできるものではないからです。今後その客観力を身につけていき、フィードバックを繰り返していくことで、それぞれにとって必要なニーズが詰め込まれた企画が出来上がっていくのだろうと思います。今回の経験を糧に、ぜひより質の良い企画を作っていくください。改めてお疲れ様でした。

受講生対談

背景や職域の違う人同士で、 “劇場”の課題に向き合った半年間。 これからの活動にどのように生かせるか？

半年間の受講を経て、参加者はそれぞれ、どのような感想をもち、どのようなことを考えているか。それぞれのチームを代表して、受講生4名にお話を聞きました。



今野はるか
劇場職員
Aチーム



児島美穂
公共ホール職員/舞台制作
Bチーム



浜田誠太郎
俳優/演劇研究
Cチーム



千田ひなた
学生
Dチーム

——企画実践編のグループワークはいかがでしたか？

浜田 うちのチームは、バックグラウンドが違う5名が集まっているんですが、抽象的な議論を深めていくところから話が進んでいきました。どういう風にプレゼンをするのかとなった時に、「パフォーマンス」をしようとなったんですが、「パフォーマンス」という言葉一つをとって試してみてもみんなのイメージすることが全然違っていった。発表会直前にすら、みんなが思い描いていたものの違いが出てきたことが面白かったです。

千田 企画発表会直前は、2日に1回くらいでZoomのミーティングをしながら進めていました。「障害のある人もない人も同じ場所で体験できる面白いこと」を企画したい！ということから始まって、イマーシブシアターの構想をふくらませていったのですが、いつもアイデアがもりもりで…！私は企画制作者でもあるので、どこかで落とし所を見つけなきゃ、となりがちなんですが、そもそも今回は、問い自体に正解がないのですし、メンバーにどんどんアイデアが沸く人がいたり、プロセスを楽しみたい人が多いので、時間をかけてこだわり尽くしています。グループの中には視覚障害をお持ちの方の同行支援をしているメンバーや、ご家族に障害をお持ちの方がいるメンバーがおり、そういう実体験を聞くところから企画が始まっていきましたね。

今野 うちのチームは、徹底的に話をすることに重きを置いている感じです。1日のミーティングでトータル7時間くらい話してい

た日もありますね…。自分が「宿題ができないタイプ」ということもあってか、メンバーも話した方が早いというか感覚派の人が多く気がしています。話しながらあでもない、こうでもないという感じ。話し合いをすることに対して投げ出す人間がいない。バンバン意見を出す人もいるし、ゆったり考えたい人もいますので、みんなが心地よく議論を進められる場づくりができるように心がけていました。

児島 皆さんの長時間ミーティングのお話を聞くと、うちのチームは、圧倒的に喋っている時間は少なかったかもしれません。そこは悩みに近かったのですが、その分どうやって自分が思い付いたことや考えたことを伝え合えるのかを考えていました。現実的に何か企画を立てることに向かって、キビキビと、議論が進んでいる感じ。自分の考えをシェアする方法を、メンバーそれぞれが、悩んでいたのかもしれない。

お題に対して、浮かべる内容もまちまちでした。中間支援をしている人、劇団をやっている人、文化事業の実施に携わっている人。メンバーそれぞれ、劇場との距離感がそもそも違ったので、どの立場で劇場について考えるのかという点で、苦労もしたし、勉強にもなりました。

「バリアをどう乗り越えるのか」ということを、自分たち自身、グループワークを通じてやっている感じがしました。

——スタート当初から変化していったことはありますか？

千田 個人的には、分かり合えなさを楽しめるようになったことが大きいです。はじめは、オンラインでうまくコミュニケーションをとっていきけるのかという不安もありました。でも、うちのチームは、ストレートに意見を伝えるタイプの方が多くて、それがかえってよかったです。意見が合わないこともあるし、年代や環境によって価値観が違うということが前提にあって。私自身、これまでは自分と他者との間に壁を引いてしまう思考の癖があったのですが、話してみたら、互いの想いは知り合えるし、前に進めるのだということに、気付かされたんです。自分と違う人を遠ざけずに、一旦出会ってみるということが必要なあとと思いました。

そもそも、障害を持っていたり、普段見えづらい問題に対する姿勢を持つことが、私自身の「生きにくさや困難」と相性が良かった、繋がりがやすかったと思っています。つまづきやすかったり、心身を崩して、劇場の空間が全部毒となってしまうことがあったりしたんです。情報保障をするにも、単なる知識の引き出しを作ればいいのではなく、想像するだけでなく、その二つを組み合わせる必要があると学びました。

今野 私は、劇場職員になってまだ1年です。新参者として、語ることに、語彙を増やすことをひとつの目的として参加しました。チームに、同じような志望動機で参加している人もいますが、ミーティングの中で、その人が話を止めて、「その話もう少し聞きたいので、もう少し語ってもらってもいいですか？」と差し込んだりすることがあった。そうするとしどろもどろになりながらも、言葉にしないとけない。それがすごく大切な体験だったんです。訊かれた本人も語りながら、改めて考えて、深く納得したりするし、聞き手も「あ、そういうことだったんですね」と深く知る。問うことの大切さを感じた瞬間でした。

日々忙殺されていると、着地点や妥協点がわかった状態で話を進めることを求められる。でも、今回一緒にしたチームの皆さんは、結構感覚派だったし、「とりあえず最後まで聞いてみる姿勢」があった。原点回帰というか、同じ方を向いていないとしても、同じレベルで相談し、語り合えたのがありがたかったです。

児島 私は、今の仕事を始めて5年経ちました。中間支援の業務って、「一歩引いている」感じがするのが、最初は違和感で、でも、自分にもその感じが染み付いているなと思って。今回は引いている場合ではなかったんですけど(笑)、それでも、どうしても業務の癖で、先に人の話を聞き取ろうとしてしまう。私って、思った以上に自分のことを開示していなかったんだ、ということに途中で気づいてハッとしたんです。ペースが受け身になりすぎていた。

組織でも、内部の合意形成をしなければならないようなことと向き合うと、横同士の考えをシェアすることや上に伝えていくことも大事だけれど、まずは自分の思っていることをぶつけたいといけななと思いました。

浜田 考え方が変わったとかじゃないんですが、メンバーの野口さんがアーティストなので、プレゼンの方法が興味深かった。みんながこれまで議論してきたことと、野口さんを中心に、「アーティストとしてパフォーマンスする」ことを実現していく過程。抽象的な議論から、パフォーマンスに落ちていくこともそうだし、このプロセスを通じて、チームのメンバーの具体的な部分が明らかになっていくのが面白いなと思っていました。

——今後のご自身の活動や今回の講座の延長で何か取り組もうと 思っていることはありますか？

児島 ダンスのカンパニーの制作でもあるので、今回出た具体的な企画や考えをメンバーにもシェアして、実際に何か、世に出る形にしたいなと思います。

浜田 チームのメンバーは、とてもバラバラだし、この後はどうなるかわからないけど、会おうと思って、きっかけがあれば会える人もいるかなと思います。

今回の企画に参加して、「人を頼ること」あるいはそれが上手くできないということが、身体(からだ)と強くかかわる話題であって、そしてそうであるが故に、議論したり話題に上げること自体難しいことなんだと気づきました。頭ではわかっていても相談できない。僕は身体行為の研究をしているので、「身体的なことは絶対言語化できない、議論できない」とは必ずしも思いません。でも、他人と話すのは難しいのではないかと躊躇してしまう。障害にもそういう部分が強くあるな、と思いました。

これから、直接“障害”を扱うかは、分からないのですが、「企画がうまくいかない」とか、アーティストのプロセスで起こる様々な課題と今回対峙した障害の話には共通項があると感じるので、これからの活動の中で、この企画で経験したことも反芻するんだろうなと思いました。

千田 今、大学3年生で、こういう気持ちをどこに生かしているかということはまだ定まっていないのですが、絶対に無駄にはならないだろうと思っています。独学でデザインを勉強したりもしているので、WEBのアクセシビリティなどについて調べることが増えました。卒論のテーマなどとも関連づけて、この学びを還元していきたいと思っています。

今野 私は、劇場の職員という立場にいますが、「来てくれた人とその先どうしていくの？」という命題、今の悩みと、今回のプログラムは繋がっていました。前職はアウトリーチ担当が多くて、そこではきっかけ作りをする役割だったと思っています。劇場職員になってみると、劇場の中で起きていることは、劇場に来た人にしか還元できない。きっかけづくりなら「もっとできるのでは」と思っていた。でも一方で、劇場に来た人にも、もっとできることも考えなきゃと考えた1年でした。うちは比較的、人が集まる劇場だと思っていますが、来てくださる層がさらに広がっていくよう、いま来てくれている人たちとともに10年、15年先を考えていきたいと思っています。

監修/メンター

障害とアート、共生と文化芸術に携わる各分野の専門家にご依頼し、本講座の監修、受講生の相談役として並走していただきました。



長津結一郎

(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)

多様な関係性が生まれる芸術の場に伴走/伴奏する研究者。障害のある人の表現活動などに研究や実践の双方から関わる。著書に『舞台の上の障害者：境界から生まれる表現』など。

企画実践編では、受講生一人ひとりのモチベーションが高く、求められているものの大きさを感じました。実際に生まれた企画そのものというよりは、この経験の種が全国各地に持ち帰られることで、どのような花が咲くのが本当に楽しみですし、またその実践の経験から私自身も学ばせていただきたいと思います。とはいえ私はというと、企画考案プロセスで時折コメントを言うばかりで、監修者として機能していたのかは心許ない限りでした。また運営面から考えると、初年度ということで必ずしもスムーズな点ばかりではありませんでした。この講座運営プロセスで課題となったことの一つひとつを将来に向けて蓄積していき、今後より良い講座に成長していくことを関係者の一人として願いたいと思います。



文

(NPO法人DANCE BOX 事務局長)

神戸・新長田の劇場「ArtTheater dB KOBE」を拠点に、コンテンポラリーダンスのアーティストの育成事業や、障がいをもつ人や国籍の違う人・地域の人とつくる事業を展開。

今回、経験も視点も様々な参加者が全国から集まり、講座、視察、映画の上映会など、一連の体験を共有した上で共に企画を行いました。そうして生まれた、アイデア、プレゼンテーションには多角的な問題意識や視点が含まれていて、それぞれのチームが、それぞれに発想が豊かで素晴らしかったです。事務局がチーム分けをしたこともあり、はじめての人たち同士が、オンラインを中心にコミュニケーションをすることに、難しさもあったと思いますが、互いの得意を生かし合って最後には、今後も協働して、何か一緒に取り組むことができる可能性のある同志になれたのではないのでしょうか。

事業全体を振り返ると、今回の事業で対象とした、舞台芸術のアクセシビリティには、「創作の環境」「(文化芸術に触れる)機会、出会いの場づくり」「鑑賞環境」など様々な要素が含まれていました。次年度以降継続できるならば、どこかに焦点を絞って深く掘り下げてみるのも良いかもしれません。おつかれさまでした!



山川陸

(アーティスト/Transfield Studio共同主宰)

人が集まって考える状況の設計に取り組む。主にツアー形式の参加型パフォーマンスを発表。ほか相談所「SNZ」、ラーニング・コレクティブ「RAU」の運営など。

それぞれの現場ですでに実践を積んでいる人たちが企画だけを作る、という立てつけの企画実践編。どんなことになるのか戸惑っていましたが、むしろ想像力たくましく、それぞれの切実な実感を持ち寄って議論していたように思います。決してなれることのない他者について想像する困難を経たからこそ、これから自身の仕事や制作の中で他者と対話し、葛藤しながら作ることができるのだと思います。

講座の運営上、自分の参加グループ以外の議論やフィードバックを聞ける仕組みでなかったのが残念でしたが、今後も交流を続けつつ、ほかの現場で起きていることにも常にアンテナを張ってほしいです。

企画(する)を実践する、ということの凄みを感じる約半年でした。実現を焦らず、しかし急ぐことは止めず、より良い場が増えていくことを願っています。僕も頑張ります。

気づきと学び —これらに向けて

障害当事者の劇場・文化施設での芸術鑑賞及び体験を充実させてゆくことを目指す施設職員やアーティストの育成プログラムとして、スタートした本事業。運営チームでポイントを振り返りました。



受講生と講師のインタラクティブな場が生まれたオンライン講座と、その地域ならではのコミュニティの熱が垣間見られた上映会

全国から約100名の方にお申し込みをいただいた入門編。オンライン講座では、講師の先生が受講生に対してお題を投げ、意識的に学べるようにポイントを提示して下さったり、質問を投げかけて下さったので、一方向ではなく、受講する方とのやりとり、意見交換の場が生まれました。

また、当事者がおかれるさまざまな環境や課題について知り、

考えるきっかけを与えてくれるドキュメンタリー映画3作品を全国5都市で上映。これをきっかけに劇場の方々や「もっとこういった取り組みを拡げていかないと!」というお話ができたことも意義深かったです。地域の方、ご協力いただいた行政の福祉課の方も喜んでくださり、良い場が生まれましたが、次年度へ向けて広報面での課題は残りました。

参加者同士の対話が深まり、未来へのあらたな協働の可能性が生まれた企画実践編

企画実践編には、文化施設職員として、よりインクルーシブな表現の場づくりや企画を深めていきたいという方、福祉の現場でこれから文化芸術の取り組みをしたい方、福祉とアートの実践を学ぶ学生の方など、さまざまな方が参加してくださいました。

企画発表会に向けたグループワークでは、それぞれ課題に取り組んでいただきましたが、企画の内容だけでなく、その過程で、

バックグラウンドの違う参加者同士、それぞれの立場から視点を深め、意見交換していったことでみえた気づき、学びも大きかったように感じます。

運営側も含めて講座が終わった後も今回の対話から生まれた学びを活かし、インクルーシブな舞台芸術の場づくりを担う人材が増えていくことを願います。

障害当事者の声をきき、考える場をつくることの大切さ

講座全体を通じ、様々な背景や職能を持つ受講生が、個々の問題意識を言語化し、自身の思考の枠に捉われず、社会にある「バリア」について考える機会を作りましたが、まずは”当事者の声をしっかりきく”ということの大切さを改めて感じました。だからこそ、講座内で障害のある人と一緒に考えるプロセスがもっと必要で

したし、次年度に向けた大事な改善点だと認識しています。併せて、劇場・文化施設職員の方々とともに考える機会も増やし、舞台芸術がより多くの方に開かれたものになるよう、引き続き尽力していきます。

文化庁委託事業「令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業」

**障害当事者の劇場・文化施設での芸術鑑賞 及び 体験を充実させる
施設職員とアーティストの育成プログラム
障害のある人と考える舞台芸術表現と鑑賞のための講座 報告書**

プロジェクトメンバー

企画・ディレクション

中村茜

制作統括

黄木多美子

プロジェクトマネージャー

星茉莉

編集・執筆

篠田栞 松本綾香

校正

箕浦萌

デザイン

LABORATORIES

主催

文化庁

一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL

企画・制作

一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL

運営

株式会社precog

